

国際教養学科の取り組みと挑戦

女子大学学芸学部
国際教養学科主任
飯田 毅

創立130周年を記念して作られた学芸学部国際教養学科は、本年4月2日「e@e」新学長の就任と共に101名の新入生を迎え、本学の歴史に新たにその名を刻んだ。本学科は本学の教育理念の一つである「国際主義」を充実、発展させるために創設された学科であり、新島の留学の志を受け継ぐ学科でもある。

3つのキーワード

本学科の特徴は3つのキーワードで表わすことができる。「英語」「留学」「教養」である。学生自身が高校まで培ってきた英語力を正規留学できるまで向上させ、留学で学んだことと本学で学んだことを統合、発展させ、真の教養を身につけることにある。

従来の大学教育は、留学したいという気持ちを持って入学した学生に対し十分な英語力を保障し、明確な目的を持たせ、帰国後留学経験を発展させるという点についてどちらかということと不十分であったと言わざるを得ない。

本学科の目指すものは、そのような従来のものとは大きく異

なる。英語圏の大学へ正規留学できるような英語力を身につさせ、留学の目標を明確に持たせ、ただ授業を受けて帰ってくるのではなく、日本と英語圏の視点の違いを徹底的に考えさせ、物事の本質を見抜く力を養成することにある。そのため、留学前は英語を徹底して身につけ、課題を持って留学し、留学前、留学中はもとより留学後も専任教員が関わりを持って細かく指導していく。

現在の取り組み

以上の目的達成のための本学の現在の取り組みを先ほどのキーワードを使って紹介してみよう。

1年次の科目は、どちらかというと留学に必要な英語力を身につけることが中心となる。英語スキル科目を7つに分け、正規留学に必要な試験であるTOEFL iBTで高得点を取らせることが当面の目標である。もちろんTOEFLで点数を取るだけが目標ではなく、最終的には留学先の大学の正規科目を受講するために必要な十分な英語力を養成することにある。そのため、Reading・Listeningクラス以外は10人程度のクラスで実施し、

そのほとんどが45分授業で、それぞれ週2回実施される。授業だけでは不十分であるという学生に対しては、本学科の設立とともに開設された英語学習支援室（ECS）で、英語力向上のためのアドバイスを受け、さまざまな教材を使って、学生それぞれの力に応じて学習できる環境を整えた。また、学生は授業

以外に毎月1回土曜日（TOEFL）のITPかPractice testのいずれかを受験することになっている。更に、学生の英語力向上のために毎回の学生の様子や授業への取り組み、TOEFLの伸びはスキル担当の先生方で分析し、直接学生の指導に生かされている。

学生に正確に留学先の情報を与えることも留学先決定の重要な要素である。留学先の大学に関する情報提

供の場として、ほぼ毎週水曜日の3校時に説明会を実施している。主に国際交流センターが中心となり、春学期までに留学先地域の特徴を概説し、それぞれの大学の紹介を行う。また、国際教養留学先の大学から講師が来られる場合は、この機会を利用して学生に講演会や交流会を実施している。

英語力、留学先の情報を持つていても、肝心なのが留学先で何を勉強するのか、という内容面の問題である。国際教養科目では、内容面の充実のために一年生の科目として「日本の歴史」「日本の文化」「イギリス研究入門」「北米研究入門」が必修として設置され、英語を媒介言語にして学生は学んでいる。また、各自が研究テーマを深める科目として、留学前までに「国際教養演習Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ」という演習科目が置かれている。現在「国際教養演習Ⅰ」では、大学の学問の基礎となる表現力、時間管理、ノートを取り方、レポートの書き方等の技能習得を目指している。

新たな挑戦

101名の学生は実にさまざまな素晴らしい能力を持っている。優秀な学生もたくさんいる。しかしながら、我々教員が学生に常に言っていることは「他人と比べるのではなく、自分自身の過去と比べよ」ということである。十分に英語力があるからそれで終わりではなく、むしろ大学に入ってからどの程度自分自身を向上させることができたかが大切なのである。我々教員自身も能力が高い学生だけを指導することで満足するだけでなく、学生自身がどれほど自己を成長させることができ、それをいかに我々が支援することができたかが真に問われている。



教育理念の共通性を軸にした新たな高大連携

―キリスト教系高等学校5校との教育連携協定締結―

2007年5月26日、大学はキリスト教系高等学校5校と、教育連携に関する協定を締結した。5校とは、新島学園高等学校（群馬県安中市）、北陸学院高等学校（金沢市）、名古屋高等学校（名古屋市中区）、近江兄弟社高等学校（滋賀県近江八幡市）、九州学院高等学校（熊本市）で、各校との間には2008年度（北陸学院は2011年度）から推薦入学制度を設けるとともに、高大連携事業を進めていく予定である。

このうち新島学園高校とは、かねてから法人内高校に準じた推薦制度を設けて交流を図ってきたが、今回の協定はこの方式にさらに広域性を持たせたものである。受け入れる学部の入学生との関係で、提供できる推薦枠に限度があるため、主として西日本の高校に対して呼びかけを試みた。大学は早稲田大学と学生交換の交流協定を結んでいるが、高校との連携は、全学的な枠組みとしては初めてのことである。

協定の趣旨

高大連携は他校でも盛んに進められているが、多くの場合、

是正し、それぞれの建学の精神の原点に立ち戻り、キリスト教主義的、人格主義的教育の充実・発展に邁進することがわれわれの進むべき道である。」

連携に名を連ねた学校はいずれも、キリスト教主義に根ざす人格形成の教育を進めてきた長い歴史を有している。こうした学校と教育理念の共通性を軸にしたネットワーク化を進め、中高から大学へ教育環境の意義ある接続を図る。その中で、建学の精神に掲げられた教育の再生をめざすというのが、この協定の意図するところである。

協定の内容

協定により実施する推薦入学制度は、従来からある学力基準中心の指定校制とは趣旨を異にする。学力ももとより重要な要素であるが、それ以上に各校の教育理念に基づいた教育をしっかりと身につけた、意欲あふれる生徒を求めている。受入基準については法人内高校と同水準とし、全学で統一した。その上で、例えば理工系では数学・理科の履修状況など、学部の特性に応じて別途、教科・科目の受入基準を設けた。

また、高校側で推薦するにふさわしい生徒がいない場合、推薦枠をあえて満たす必要はないという運用にしたのも特徴である。指定校制であれば推薦依頼の見直し対象になることがあるが、この制度は長期的な視野で対応するのが必然であり、高校側と積極的に話し合っ、改善の方向をとともに考えていくという姿勢をとっている。

2008年度については、この方式による推薦入学を経済学

高校にとつては進路先の、大学にとつては入学者の確保策という意味合いが強い。しかし、本学は早くから法人内高校4校をはじめ、全国の指定校から広く推薦入学を実施しており、推薦数の拡大という目的だけでは連携の動機づけになりえなかった。昨年度、大学が相互評価・認証評価を受けた際、最初に問われたことは、建学の精神や教育理念が教学にどのように具現化されているかという点であった。偏差値的学力だけで大学が評価される時代は過去のものとなり、国公立大学との差別化を図る意味においても、私学は建学の精神に基づく教育の特色を強く打出すことを求められている。

今回の協定は「キリスト教主義学校の連携ネットワーク」の趣意に基づいている。これは去る3月以来、各校間で協議して合意に至ったもので、次のようにうたっている（以下、一部を引用）。「現在、社会状況の急激な変化にともない、教育にかかわる多種多様な問題が提起されているが、そうしたなかで現在ほど豊かな人間性を涵養する教育が切望されている時代はない。偏差値的学力の追求によって歪められた現代の学校教育を

部を除く10学部で実施し、推薦依頼人数は合わせて81名（2008年度実施の4校と神戸女学院高等学部の合計）となった。

また、生徒に対して志望学部の十分な理解と入学意思の明確化を促す大学紹介行事を実施するほか、相互理解を深めるために、教職員や学生生徒の交流の場の創出も計画している。

同志社はキリスト教系の学校法人としては日本で最大規模であることから、この取組みを主導する形で進めてきた。各校間ではさらに協議を継続し、高大間にとどまらない多角的かつ包括的な交流へと発展させていく予定である。

連携各校のプロフィール

(2007.5.1現在)

高 校 名	所在地	クラス数	生徒数	教員数
新島学園高等学校	群馬県安中市	15クラス 全日制・普通科	618	専任31（中高計52） 嘱託10（中高計21）
北陸学院高等学校	石川県金沢市	11クラス	306	専任24（中高計34）
名古屋高等学校	愛知県 名古屋市	37クラス（高三12、 高二13、高一12）	1,453	専任76、嘱託33
近江兄弟社高等学校	滋賀県 近江八幡市	学年制21クラス 単位制7クラス	971	専任49、嘱託15
九州学院高等学校	熊本県熊本市	26クラス	1,020	専任68

二條家屋敷を掘る

—同志社女子大校地での発掘調査—

大学歴史資料館専任講師

若林 邦彦

同志社キャンパスと「京の中枢」

同志社大学・同志社女子大学の今出川校地は、中・近世京都の中枢に位置する。14～17世紀には室町幕府の「花御所」が現在の室町キャンパス（寒梅館）の位置にあり、周囲に細川・伊勢といった幕府有力守護大名の居宅があったことが、『洛中洛外図』（上杉家本）にはっきりと描かれている。17～19世紀には、伏見宮家が女子大西半、近衛家の別邸が新町キャンパス、二條家が女子大東半、さらに藤谷家・徳大寺家・薩摩藩邸などが今出川キャンパスに所在した。いまでも、校舎に隣接して、冷泉家邸が現存していることは良く知られている。この地域は、約500年もの間、有力な宮家・公家・武家が立ち並び、政治的空間であり続けたのである。これは、室町幕府の設置後、15世紀の応仁の乱以降に内裏（天皇の居所）が現在の位置に移動し、その周辺に公家衆などが多く集住したことによる。

つまり、今出川校地の諸校舎は、中・近世における「京の中心」を知る上で重要な遺跡の上に建っている。同志社大学では1970年代後半以後、校地学術調査委員会などによって校舎・施設建設によって破壊される遺跡を記録保存する工事前の

発掘調査を行い、可能な限りの遺構保存やその展示などに尽力してきた。現在は、同志社大学歴史資料館が、法人諸学校内の校内遺跡の調査研究の責を受け継いでいる。

二條家屋敷の調査

この原稿を書いている現在（2007年7月）、歴史資料館では同志社女子大内で発掘調査を行っている。女子大校舎建設によって遺跡が失われることになる、約1500㎡の範囲を調査している。近世の絵図類からは、心和館南にある今回の調査地点が、二條家屋敷地だったことがわかっている。二條家は、朝廷の要職を担う「五摂家」の一角をしめる高格の公家である。今回の発掘調査で注目されるのは、調査区西半で見つかった江戸時代末期（18世紀末～19世紀前半）の大きな庭園跡である。南北約30㎡にわたる規模の巨大な人工池や、その水位を調節するための集水槽が、すべて漆喰により作り上げられていたのである。また、この人工池につながった陶管と漆喰升を組み合わせた導水施設も調査区東半で見つかった。つまり、今回の調査区域約1500㎡全面に、人工池を核とする大規模な庭園施設が造られていたことになる。

江戸時代の漆喰造りの池は、京都御苑内の近世公家町の発掘調査で数m規模のものはいくつか知られていたが、これほどの大規模施設は、京内の調査では初見である。摂家の屋敷にふさわしい壮麗な庭園と言えよう。

また、この人工庭園が作られる以前、17世紀後半～18世紀に造られた屋敷内の様々な建物も検出されている。砂利を敷き詰めた道路の両側に礎石建ての家屋が整然と並び、石組造りの排水溝がその間にはりめぐらされた様子が明らかに。さらに重要なのは、それらが何度も建替え・造り替えられた変遷をはっきりと知ることができたことである。調査で観察される土層の様子からは、繰り返し起こった火災によって建物跡は何度も焼土に覆われ、加茂川から押し寄せる洪水によって屋敷地は砂に覆われたようだ。そのため、災害を受ける直前の建物群の状態が、そのまま焼土や洪水砂層にパックされて残された。

災害により残された遺構群から、二條家がこの地に居を構えた約200年の間に、最低5回の施設群の建替えが行われたことがわかった。約30・40年ごとの建替えである。江戸時代の大名屋敷などでは、当主の代替わり時に建替えを行う例も知られているが、似たようなことが行われていたのではと類推できる。壮麗な庭園の建設も含め、前近代の摂家が、ただの伝統象徴ではなく、最新の建物・施設を誇示し続けるリアルパワーだったことがよくわかる調査成果だろう。

大学が行う発掘調査

調査成果は、2007年6月に現地説明会を行って一般に公開し、約400名という多くの参加者があった。それ以外に、授業利用なども含め法人内諸学校からの調査見学者はのべ300人を越えている。また、考古学・歴史学を学ぶ約20人の本学学生が調査に参加し、発掘調査の実地訓練の場としても利用さ

れている。まさに、遺跡は文化財・歴史情報の発信や教育の実践現場である。大学が遺跡を自ら掘るということは、単に文化財保護の責を果たすだけでなく、様々な効果を持っている。

調査は2007年8月終了予定で、その後は成果を学術公表するべく、発掘調査報告書の作成作業を行う予定である。できれば、一般市民向けに調査成果を記した小冊子なども刊行したい。また、出土した遺物は、京田辺校地にある歴史資料館や、今出川校地の寒梅館の展示施設で公開予定である。多くの人に足を運んでもらえるよう、努力を続けたい。歴史資料館の活動を通して、大学が遺跡・文化財に直接関わることで得られる効果を、学内外の多くの方々を知っていただければ、望外の喜びである。

なお、調査成果は歴史資料館HPでも公開しているので、ぜひアクセスを。<http://museum.doshisha.ac.jp/>。



漆喰造りの集水槽（幕末）



漆喰造りの池（幕末）